

## 小学校段階におけるキャリア教育についての一考察

### A Study of Career Education in the Elementary School

辻井 満雄 氷見 卓也

TSUJII Mitsuo HIMI Takuya

児童期の子供たちには自由闊達に「夢」を描き、その実現に向けて努力していく姿勢を期待している。さらには、まだ見ぬ職業を生み出す豊かな創造力を発揮してほしいと願っている。そのような子供たちの姿を現実のものとするためにも、児童期のできる限り早い段階からキャリア教育を推進していく必要があると考える。そこで本研究では、小学校6年生を対象とした「総合的な学習の時間」の展開を切り口として、児童期、特に小学校段階におけるキャリア教育について考察していく。児童から保護者へのインタビュー調査を差し込んだことにより、「仕事＝疲れる・大変」とネガティブに捉えていた多数の児童が、「働くこと」に対して肯定的な印象を抱くように変容した。このように、児童にとって最も身近である保護者の職業観に触れたことは、文部科学省（2004）が課題と述べる「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」に十分に関わる展開であったと考える。

キーワード： キャリア教育 になりたい自分 働くこと

#### 1 はじめに

児童期、誰しもが何かしらの「になりたい自分」や「夢」、現実的に置き換えると「就きたい職業」を思い描くと考える。当然、成長に伴い、自己の能力の限界を知って「就きたい職業」を諦める者、「就きたい職業」に向けて努力し続ける者、「就きたい職業」に就くことを実現し、次の「夢」を探す者等、個々の人生は千差万別に進んでいく。

また昨今、AI（人工知能）やロボットの開発が急速に進展し、我々の環境に大きな影響を及ぼそうとしている。オックスフォード大学の研究者であるマイケル・A・オズボーンら（2013）は、今後10～20年のうちに、AIやコンピュータ技術の導入によって、今ある職業のうちの47%が自動化すると予測している。つまり、現在、児童期にある子供たちが思い描く「就きたい職業」が、彼らが就職する年齢に達したときには存在していない可能性もあるということである。

しかし、このような時代の流れの中にあっても、やはり児童期の子供たちには自由闊達に「夢」を描き、その実現に向けて努力していく姿勢を期待したい。さらには、まだ見ぬ職業を生み出す

豊かな創造力を発揮してほしいと切に願う。そのような子供たちの姿を現実のものとするためには、中学校段階で初めて進路指導を受け、自己の未来やキャリアを意識していくのでは到底時代の流れには追い付けないと思う。小学校段階の児童期からキャリア教育を推進していく必要があると考え、研究を通して、児童期のキャリア教育の必要性を確認したい。

そこで本研究では、小学校6年生を対象とした「総合的な学習の時間」の展開を切り口として、児童期、特に小学校段階におけるキャリア教育について、考察していく。

## 2 研究の概要

### (1) 本研究における調査の方法

#### ① 調査対象

A県B市C小学校 第6学年26名(男子13名 女子13名)

#### ② 調査期間

第1回調査・・・児童へのアンケート調査(2018年5月に実施)

第2回調査・・・児童へのアンケート調査(2018年6月に実施)

第3回調査・・・児童による保護者へのインタビュー調査(2018年6月に実施)

第4回調査・・・児童へのアンケート調査(2018年7月に実施)

#### ③ 調査内容

「総合的な学習の時間」の単元名を「夢 ～なりたい自分を思い描いて努力していこう」と題し、小学校段階におけるキャリア教育がいかに展開可能かを探ることとした。

導入では、児童が、幼児期において生まれて初めて描いた「なりたい自分」について、アンケート調査を行った。

次に、現存する職業について、いかなる意識をもっているのかを調査するため、児童にとって身近である保護者(父母、祖父母の中から1名を選択することとした)を選び、身近な保護者の職業の内容等を彼らがどれだけ知っているのかについてアンケート調査を行った。

さらに、第2回アンケート調査後、児童から保護者へのインタビューを実施し、保護者の職業の内容等の詳細を実際に聞き取った。そうすることにより、初めに自分が抱いていた保護者の職業への印象との乖離から新しい発見をしたり、自己のキャリアビジョン<sup>(1)</sup>について考えるきっかけとなったりするのではないかと考えたからである。

最後に、この活動を通して、「自分は『将来の仕事』についてどのように考えるようになったか」について、自由記述のアンケートをすることで、児童個々のキャリアビジョンの変化を導き出すこととした。

(1) weblio(2018)によると、「キャリアビジョンとは、人生・仕事において自分自身のなりたい姿を指す。以下の事柄に重点をおくと、具体的、且つ実現可能なキャリアビジョンを描くことが可能となる。絶対に譲れない価値感、考え方、欲求：将来像を検討する際には、大切にしている価値感等が反映されていることが重要である。仕

事、人生における過去・現在：自身が興味を持っていること、過去どのような事柄に活気を与えられたか等を洗い出すことで、自身の事をより理解することができ、なりたい姿がより明確になる」と説明している。

## (2) 分析の方法

第1・2・4回調査の計3回行った児童へのアンケート調査結果は、回答を類型化し、円グラフに表し、学級における児童たちの自己のキャリアに対する意識の傾向を掴み、考察することとした。類型化する際の観点については、「5 研究の内容」で詳しく記述する。

第3回調査の児童から保護者へのインタビューの分析については、保護者のどのような語りがその後の児童のキャリアビジョンの変化に影響を与えたかを導き出すため、保護者の語りに共通するキーワードを導き出し、考察した。キーワードの抽出についての詳細も、「5 研究の内容」で記す。また中でも、キャリアビジョンの変化が特に顕著に現れた児童を抽出し、分析していく。

## 3 キャリア教育を通して育てたい力

文部科学省は、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)において「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育がキャリア教育である」と定義している。さらに、「社会・職業への円滑な移行のために求められる力」として、「基礎的・汎用的能力」と「専門的能力」の2つの能力を培う必要性についても述べている。

- ・「基礎的・汎用的能力」・・・社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力
- ・「専門的能力」・・・特定の職業を遂行するために必要な専門的技術や技能等

この2つの能力をどの発達段階で育成していくのかを考えたとき、「専門的能力」はその特質上、主として職業教育において育成すべきと考えられる。一方、「基礎的・汎用的能力」はどの職業に就くにしろ必要となる基盤づくりであるため、義務教育である小学校・中学校段階から、主としてキャリア教育で育成すべき能力とされている。

主に小学校・中学校段階におけるキャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」については、さらに以下の4つの能力に分類される。

### <基礎的・汎用的能力>

#### ①「人間関係形成・社会形成能力」

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ、他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力

#### ②「自己理解・自己管理能力」

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動す

ると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ今後の成長のために進んで学ぼうとする力

③「課題対応能力」

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力

④「キャリアプランニング能力」

「働くこと」を担う意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

以上のような能力を、「各教科」、「特別な教科 道徳」、「総合的な学習の時間」、「特別活動」等、学校の教育活動全体を通じて児童生徒に培っていくことが求められている。しかし、これらの能力はあまりに幅が広く、捉え方次第では日々の教育活動を行っていくことが、キャリア教育と全て結び付くとも考えられる。つまり、漠然とする可能性があるということである。

また加えて、AI等の進歩に伴って予想される未来の職業の在り方の変化等も視野に入れたとき、より早い発達段階からの具体的なキャリア教育の計画立案、実践、改善、そしてそれらを研究として蓄積していくことが急務であると考えられる。

文部科学省は、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告 ～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」（2004）において、小学校段階は進路の探索・選択にかかる基盤形成時期と位置付けている。またその課題として、「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」を挙げている。

本研究では、調査対象を小学校第6学年としているため、上記の課題を踏まえた展開を目論み、「夢 ～なりたい自分を思い描いて努力していこう」と題した「総合的な学習の時間」を設定した。「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」を、児童自身と保護者への関心と位置付けた。また「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」を、身近である保護者の従事する職業について関心・意欲を向上できるように設定した。「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」については、保護者がもつ職業への思い等を聞き取ることにより、自分の将来と照らし、夢や希望を抱くことを期待した。「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」に関しては、最も実践力を伴う高次なものであると考えたため、学級開きから3か月という現段階では具体的には関連させないこととした。

いずれにせよ、現実的選択と暫定的選択の時期と位置付けられる中学校段階ではないため、様々な職業について捉える上で視野を少しでも広げていける、また未来に希望を抱いていけることに重きを置いた、小学校段階におけるキャリア教育の展開を目指すこととした。

#### 4 新学習指導要領におけるキャリア教育

2020年、小学校では新学習指導要領の全面実施が予定されている。文部科学省は、「新学習指導要領（平成29年3月公示）幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」（2017）において「教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の

実践や蓄積を活かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成する。その際、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視する」と述べている。これは、学校教育と社会全体とのより密な連携・協働を意味していると捉えることができる。さらに言えば、AI等と共存しながら生きるであろう未来を見据えた上で、これから社会で求められる資質・能力がいかなるものであるのかを、学校教育と社会全体が共同して探究していくことを意味していると考えられる。

このため、早い発達段階からのキャリア教育の充実が必要不可欠となってくる。そこで教師は、従来の授業研究や教材研究を行うに留まらず、「今、社会で求められる力とは何か」「本当に社会で通用する人間とはどういった人物なのか」「どのような教育活動が子供たちの明るい未来につながるのか」といった、よりキャリア教育を意識した教育活動を行っていかねばならなくなると考える。

実際、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編（2017）においても、「特別活動に進路に関連する内容が存在しない小学校においては、体系的に行われてこなかったという課題もある。また、将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかと、といった指摘もある」と述べられており、やはり小学校段階からのキャリア教育の充実が、今、強く求められていることが分かる。また、「さらに、キャリア教育を進めるに当たり、家庭・保護者の役割やその影響の大きさを考慮し、家庭・保護者との共通理解を図りながら進めることが重要である」とも述べられている。

それを受けて本研究では、児童にとって身近である保護者の職業に焦点を当てることとし、児童にとって「家庭・保護者の役割やその影響」がいかなるものであるのかを導き出すことを試みた。

さらには、児童が保護者に「働くこと」についてインタビューを行うことにより、保護者自身も、我が子が職業人として生きるであろう未来について意識するきっかけとなることも期待できる。

## 5 研究の内容

### (1) 第1回目のアンケート調査の結果

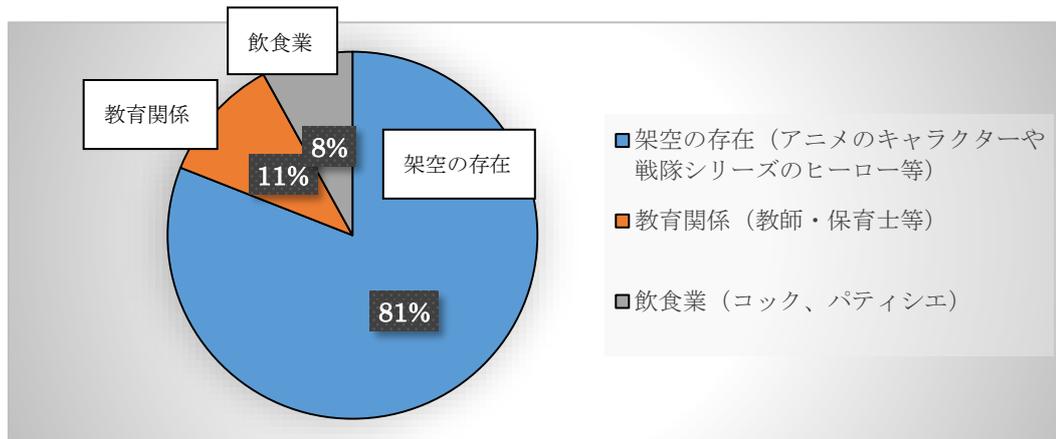
2018年5月に実施した第1回目のアンケート調査では、児童が生まれて初めて描いた「なりたい自分」（主に、保育所の児童、幼稚園の幼児であった時期に描いていたもの）がいかなるものであったかについて聞き取った。また、「なりたい自分」を類型化する際に、現実の職業にはないものを「架空の存在」とまとめ、実際の職業については、業種によってまとめることとした。

調査内容は以下のとおりである。

質問	生まれて初めてなりたいと思ったもの（職業等）は何ですか
----	-----------------------------

以下に、その結果を円グラフにまとめたものを示す。

【資料1 第1回目のアンケート調査の結果】



アンケートの結果、81%の児童が幼児期に憧れを抱いていたテレビ番組のヒーロー等の名前を挙げた。(女子の大半もお姫様等のキャラクターではなく、悪に立ち向かう強いヒロインを挙げた。) この結果から、幼児期には当然、まだキャリアビジョンが明確に描かれていない児童が多いことが分かる。その一方で、少数ではあるが実際に存在する職業を挙げた子供が19%いた。その子供たちに「今も『なりたい自分』は同じか」を問うたところ、教育関係を挙げた11%は小学校第6学年となった今も変わらず目指していることが分かった。(81%の「架空の存在」を挙げた児童にも同様の質問をしたが、第6学年となった現在では実際には誰も目指していなかったことは言うまでもない。)

あくまで本学級の児童26名のデータではあるものの、多数の子供たちが描くキャリアビジョンが具体的になるためには、小学校入学を果たし、児童期に様々な体験を積んだり、様々な情報を得たりすることが必要不可欠であることが分かった。

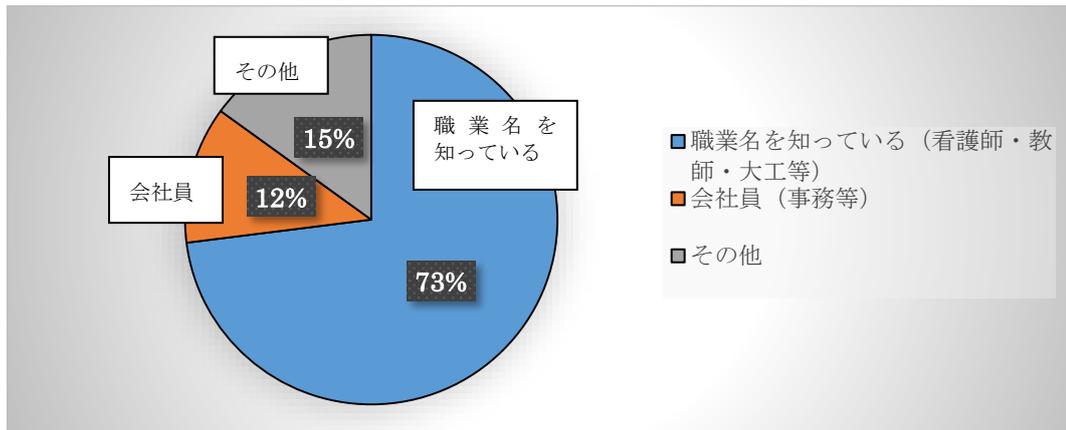
(2) 第2回目のアンケート調査の結果

2018年6月に実施した第2回目のアンケート調査では、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告 ～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」(文部科学省:2004)がキャリア教育の課題として挙げる「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」を追究するために、児童にとって身近である保護者の職業について、児童自身がどれだけ知っているのかを調査することとした。調査内容は以下のとおりである。

- 質問① あなたの家族の職業は何ですか (父母、または祖父母でもかまいません)
- 質問② あなたが知っているその職業のことを、どんなことでもよいから書いてみましょう (何時に家を出て、何時に帰ってくるか。どんな仕事内容なのか。家に帰ってきてからの様子等)
- 質問③ あなたはその職業について、どのように思っていますか

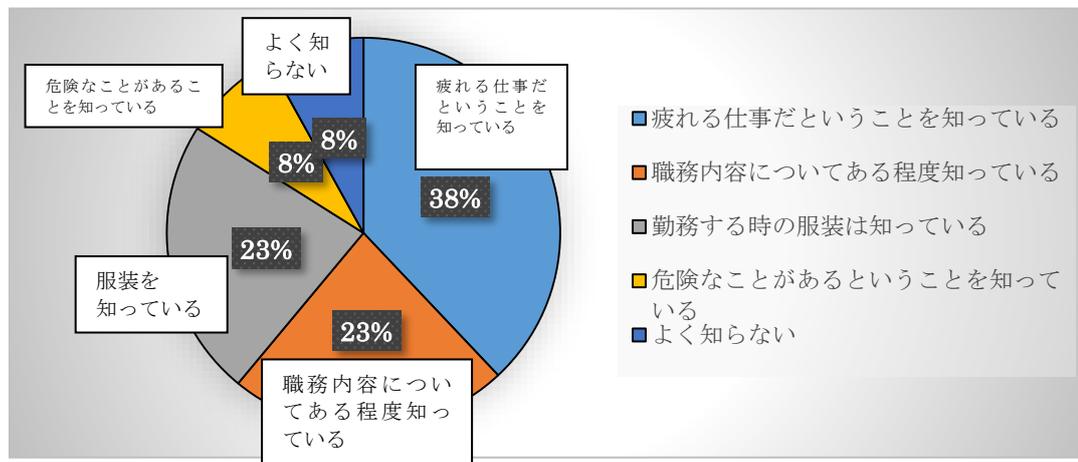
以下に、その結果を円グラフにまとめたものを示す。

【資料2 第2回目のアンケート調査 質問①の結果】



以上の結果から、児童自身の保護者がどのような職業であるのかを知っている児童が多数いることが分かった。教師、医師、看護師、介護士、大工、美容師等の職業名が明確で児童にも馴染み深いものについては答えやすかったのであろう。しかし一方で、12%の「会社員」や15%の「その他」の中には、「会社」「会社で事務をしている」「よく分からない」と答えた児童がいることから、自身の保護者の職業に明確なイメージを抱けない児童もいることが分かった。

【資料3 第2回目のアンケート調査 質問②の結果】



質問②では、保護者の職業について知っていることを児童に尋ねた。円グラフに類型化する際に、全ての児童が保護者が何時に出勤して何時に帰宅するかを回答していたため、類型には入れず割愛した。また、「お客さんにメガネを売っている」「お客さんの家にエアコンを取り付けに行く」「建築現場の足場を作っている」といった程度のことが答えてあれば、「職務内容についてある程度知っている」に含めることとした。

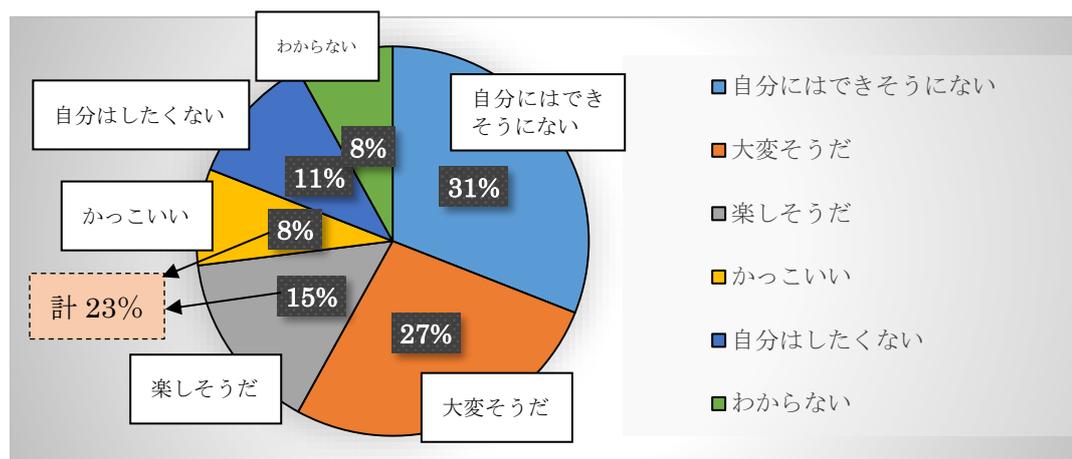
「職務内容についてある程度知っている」児童は23%であり、家庭において何かしら保護者から仕事について聞いた経験があると予想される。

一方、「疲れる仕事だということを知っている」児童が38%、「危険があることを知ってい

る」児童が8%、計46%であった。その結果から、全体の半数近くの児童が、「労働は、大変なことである」というネガティブなイメージを抱いていると考えられる。

また、グラフを総合的に見た場合、「勤務するときの服装」「危険なことがある」「疲れる」という程度のことは知っているが、その職業の内容までは詳しくは知らない児童が多いことが読み取れる。(総じて77%の児童が、保護者の職業の内容をよく知らないと読み取ることができる)

【資料4 第2回目のアンケート調査 質問③の結果】



質問③では、保護者の職業についてどのように思っているのかを尋ねた。

グラフから、「自分にはできそうにない」31%、「大変そうだ」27%、「自分にはしたくない」11%の計69%の多数の児童が、保護者の職業に対して肯定的に捉えることができないことが読み取れる。その結果と、質問②において「疲れる仕事だということを知っている」児童が38%、「危険があることを知っている」児童が8%、計46%であったことと関連させて考えると、多数の児童の中に「働くこと＝疲れる・大変」という印象が強く根付いているのではないかと考えられる。

一方で、「楽しそうだ」15%、「カッコいい」8%の計23%が児童自身の保護者の職業について、肯定的な印象を抱いていることが分かった。また注目すべき点は、それらの児童は質問②において「職務内容についてある程度知っている」と回答した23%の児童と同一の人物たちであったという点である。

この点から、日常の家庭生活において、保護者から何かしら仕事について聞かされている児童たちは、自身の保護者の職業について肯定的な印象を抱くようになるとも考えられるのではないだろうか。

### (3) 第3回目のアンケート調査の結果

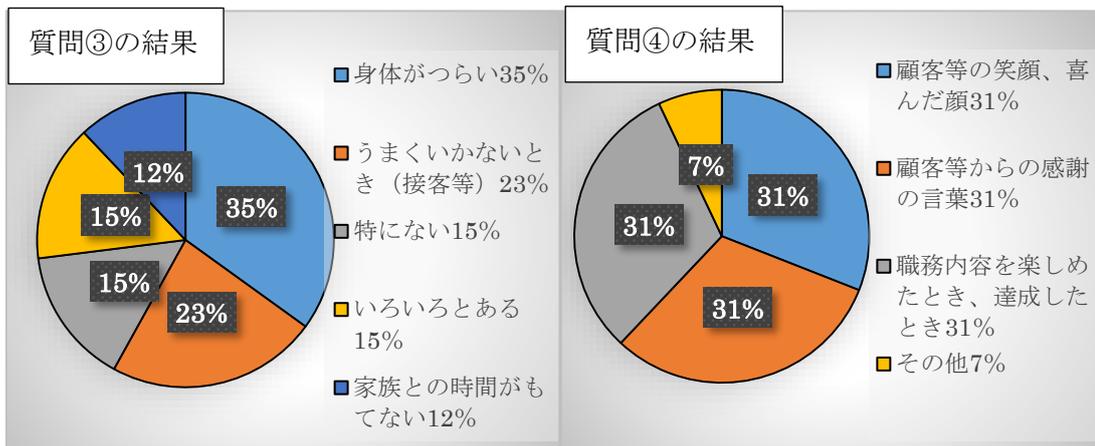
児童が抱く保護者の職業への印象と実際との乖離や新たな情報が、児童がキャリアビジョンを描くことに何かしら影響を及ぼすと考え、第2回目の児童へのアンケート調査後に、児童が保護者に対して職業の内容の実際等について聞き取るインタビュー調査を行った。

以下は、インタビュー調査の項目である。

- 質問① あなたの職業は何ですか  
 質問② あなたがその職業を選んだ理由は何ですか。また、どのようないきさつでその仕事に就くことになったのですか  
**質問③ 働いているとき、つらいことはありますか**  
**質問④ 働いていて、どのような喜びがありますか**

上記4つの質問項目のうち、その後行った第4回目の児童へのインタビュー調査の結果、児童がキャリアビジョンを描くことに最も影響を与えたと考えられた下線部太字で示した質問③、質問④について、保護者の回答を類型化して円グラフに表すこととする。第4回目の児童へのインタビュー調査の結果については、詳しく後述する。

【資料5 保護者へのインタビュー調査 質問③、質問④の結果】



質問③は、職務を遂行する上での苦難を問うているため、当然、ネガティブな項目が並ぶ。しかし、児童が「働くこと」を現実的に捉えることができるようになるためにも、働く大人の生の声を聞くことは重要であると考えたため、質問項目に加えた。第2回目のインタビュー調査の結果からも分かるとおり、児童の69%が「大変そうだ」「自分にはできそうにない」などのネガティブな印象をもっているため、保護者の回答と児童の予想はほぼ合致したのではないかと考える。

一方、質問④は、「働くこと」の喜びについて質問している。この質問項目に対する回答は大きく分かれる結果となり、多くの保護者が共通した喜びを感じていることが分かった。その結果から、保護者の「働くこと」の喜びに共通するキーワードを、筆者の視点で以下のように抽出した。

相手の (利他的)	「感謝」	「喜び」	「笑顔」
自己の (利己的)	「楽しみ」	「達成感」	

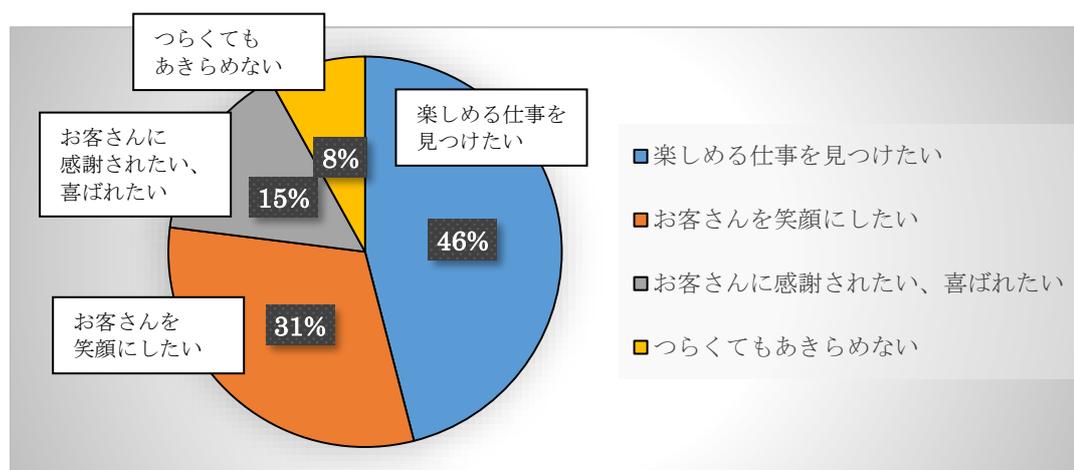
(4) 第4回目のアンケート調査の結果

2018年7月に実施した第4回目のアンケート調査では、保護者のインタビュー調査の結果から導き出したキーワードを基にした「自分は『将来の仕事』についてどのように考えるようになったか」を調査した。

質問 あなたは、自分の「将来の仕事」について、どのように考えるようになりましたか

以下は、その結果を類型化し、以下の円グラフに示したものである。

【資料6 第4回目のアンケート調査の結果】



第4回目のアンケート調査の結果を見ると、前述したキーワードである、自己の「楽しみ」46%や相手の「笑顔」「感謝」「喜び」が計46%と多数を占めている。またさらに言えば、「つらくてもあきらめない」という項目は、キーワードである「達成感」につながるとも捉えられる。つまりこの結果から、多くの児童が描いていた「働くこと＝疲れる・大変」といった印象が、保護者へインタビュー調査を行い、新たな情報を得たことによって、肯定的に大きく変容を遂げたことが分かる。

中でも、大きく肯定的に変容を遂げたD児を抽出してその詳細を記す。

<D児の変容>

(第1回調査のアンケートでは)  
特撮物のヒーローになりたかった。



(第2回調査のアンケートでは)  
父は郵便局員であり、朝は7:30頃に出ていき、帰りは18:30頃に帰って来る。帰って来ると疲れた顔をしている。自分には大変そうで、できないだろうと思う。



(第3回調査の保護者へのインタビュー調査で得た情報)

- 1、郵便局のかんぽ担当
- 2、最初は3年間、郵便配達の仕事をしていた。その後、窓口で入院保険や死亡保険金の支払い手続き、保険の営業をしている。かつては公務員だったが、今は民営化して会社員である。
- 3、つらいことは特にない。しかし、仕事量が多かったり、営業がうまくいかなかったりするときは大変である。そんな時でも、歯を食いしばって仕事している。
- 4、お客様とお話をしているとき「ありがとう」と言ってもらえることが働く喜びである。



(第4回調査のアンケート調査の結果)

僕は将来、父とは違う、もっと身体を動かしながらする仕事をしたいと思います。けれど、どんな仕事に就いてもつらいことがあると思います。そんなときは、うまくいなくても、父と同じように歯をくいしばってやり遂げたいです。今回、父の話聞いて、仕事の内容がどれだけ大変でつらかったとしても、僕もあきらめたくないなと思いました。これから、学校でのいろいろなこともあきらめないようにしていきたいです。

D児は、第1回目のアンケート調査では父親の仕事はよく知らないが、大変そうだから自分にはできないと思っていた。しかし、父親にその職務の実際や職務に向かう思いを聞いたことにより、「あきらめなくて職務を達成していく」そんな思いを受け継いだように見える。D児は、今はまだ就きたい職業が明確化していないが、確実にキャリアビジョンを変容させたと捉えることができる。

## 6 考察

研究の内容で示した調査の結果から明らかになったことを示し、小学校段階におけるキャリア教育について、考察していく。

第1回目のアンケート調査の結果から、当然、幼児期の子どもは、現実的なキャリアビジョンを描いていないと確認できた。小学校入学以前の子どもたちが、テレビに映るヒーロー等に憧れることは自然であろう。男女共に多数が「誰かを救う」ヒーロー、ヒロインを挙げたことも、後に「利他的」な行動を意識する素地となっている現れかもしれない。

次に、第2回目のアンケート調査の結果から、第6学年の児童の多くは、自身の保護者の職業の名称は知っているが、77%はその職務内容についてはよく知らないことが明らかとなった。また、帰宅後の保護者の疲れた様子等から、「自分にはできそうにない」31%、「大変そうだ」27%、「自分はしたくない」11%の計69%の多数の児童が、保護者の職業を肯定的には捉えて

いないことが分かった。

しかし一方で、保護者の「職務内容についてある程度知っている」23%の児童たちは、自身の保護者の職業に対して「楽しそうだ」「かっこいい」といった肯定的な印象を抱いていた。つまり、日頃から児童と保護者との間に仕事についての会話がなされ、職業についての情報が児童に幾分か与えられている場合は、児童がキャリアビジョンを肯定的に描くことにつながるのではないかと考える。

保護者へのインタビュー調査を実施する以前の児童77%は、自身の保護者と職業について語らう経験は乏しかったのではないかと考えられるため、帰宅後の保護者の疲れた様子等、少ない情報から「働くこと」に対して主観的にネガティブなイメージを作り上げていたのではないだろうか。

第4回目のアンケート調査以前に、実際の職務について、児童が保護者にインタビューする活動を差し込んだ。多くの児童にとって、保護者の職務に向けた思いまでを聞くことは初めての体験であったと考えられる。その際、質問③「働いているとき、つらいことはありますか」、質問④「働いていて、どのような喜びがありますか」といった項目に対し、多くの保護者が共通して使うキーワード（相手の「感謝」「喜び」「笑顔」、自己の「楽しみ」「達成感」）を抽出した。そのキーワードには、保護者自身の職務への思いだけでなく、併せて我が子への「こんな思いをもって働く大人になってほしい」という願いも込められていたのではないかと考える。

第4回目のアンケート調査「自分は『将来の仕事』についてどのように考えるようになったか」の結果において、これらのキーワードが、児童がキャリアビジョンを描く際に大きな影響を及ぼしたことが見て取れた。自己の「楽しみ」46%や相手の「笑顔」「感謝」「喜び」が計46%と、抽出したキーワードがほぼそのままの形で現れている。

児童から保護者へのインタビュー調査を差し込んだことにより、「仕事＝疲れる・大変」とネガティブに捉えていた多数の児童が、「働くこと」に対して肯定的な印象を抱くように変容したと言える。

このように、児童にとって最も身近である保護者の職業観に触れる授業展開により、文部科学省（2004）が課題と述べる「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」を向上させることができたと考えられる。

本研究は、児童にとって身近である保護者から職業についての詳しい情報、特に職業に対する思いを伝えられることにより、児童がキャリアビジョンを肯定的なものとして描くようになるという点において、一定の示唆を得ることができたと考えられる。

また、児童にとっての最も身近な「働く人」である保護者との間に、「働くこと」に関する対話を差し込むことは、小学校段階におけるキャリア教育の切り口として有効であると考察する。

## 7 今後の課題

本研究は、今後の小学校段階におけるキャリア教育の展開について、ある一定の知見を得ることができた。しかし、一般性を求めるためには課題が残る。それは、調査対象が26名の児童という限定的なデータである点、保護者へのインタビュー調査が各児童を通して行われたもので

あり、児童の聞き取りに能力差があると考えられる点、分析や解釈に筆者自身の主観が入り込む点である。

今後は、以上の課題を補うため、多面的なデータを蓄積し、より客観性ある分析を試みていく必要がある。また、6年生以外の学年においても、キャリア教育を実践し、どんな方法がどのような効果をもたらすのか研究を継続していきたい。

## 8 おわりに

人工の減少やA I等の急速な発展により、未来がどのような職業体形を成していくのか、現在児童生徒である者たちがどのように働いていくのか、我々は容易には想像できなくなった。そんな混沌とした中であっても、児童生徒には広いキャリアビジョンを描き、たくましく生き抜いてほしいと願う。

そのためにも、我々教師、否、大人全員が、児童生徒に対して「こんなおもしろい仕事があるよ」、「社会にこのように役立っているよ」、「つらいこともあるけれど、喜びもいっぱいあるよ」といった肯定的な情報を、胸を張って提供していくことが大前提となるのではないだろうか。

その一助となることができるよう、教師として、今後でもできる限り早い発達段階からのキャリア教育の実践・リフレクション・改善して、また実践を繰り返し、研究として蓄積していきたい。

-

## 文献リスト

- 1) Carl Benedikt Frey & Michael Osborne (2013) The Future of Employment:How susceptible are jobs to computerization? Published by the Oxford Martin Programme on Technology and Employment
- 2) 文部科学省 (2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告 ～児童一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」  
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/21career.shiryoku/honbun/koumoku/1-11.pdf>  
最終アクセス 2018年8月14日
- 3) 文部科学省 (2011) 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)  
最終アクセス 2018年8月14日
- 4) 文部科学省 (2017)「新学習指導要領 (平成 29 年 3 月 公示) 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf) 最終アクセス 2018年8月10日
- 5) 文部科学省 (2017)「小学校学習指導要領 (平成 29 年 告示) 解説 総則編」
- 6) Weblio 辞書 (2018) 人材マネジメント用語集 キャリアビジョン  
<https://www.weblio.jp/content/キャリアビジョン> 最終アクセス 2018年8月24日